

服部 義幸／はっとり よしゆき 釧路管内弟子屈町生まれ。会社勤めをやめ、27歳で調教師に弟子入り。厩務員を2年経て、ばんえい競馬の騎手となる。40歳で独立し服部厩舎を構える。2005年、調教師として史上6人目の通算1000勝を達成。2002年4月から7代目の調騎会会長に選ばれ、現在2期目。



帯広競馬場のコースのすぐ横に設けられた「エキサイトゾーン」では、観客が声援を送りながら馬と一緒に移動する。岩見沢競馬場にも設けられており、馬の振動が伝わるとファンからも好評だ

Yoshiyuki Hattori



場だという。「目の前を駆けぬけるサラブレッドに何万人もの人が歓声を上げる。しかも花火まであがる中を馬たちが走っている。こうやってお客さんに喜んでもらうのがプロの仕事だと思っただね」

どこまでコースと観客を近づけるか、騎手たちと話し合いを重ねた。最初は戸惑っていた騎手も、自分の名前をすぐそばで呼ばれることでもますます気合が入るようになってきた。「競馬はそもそもお客さん本位のものだからね。望まれていることは何でもやってみよう」

思いついたらすぐ行動 人間たちも走り出した

服部氏が会長職に就いたのは2002年4月。さっそく調騎会の中に広報委員会をつくり、ともかく「ばん馬」という言葉が世に出ることをやってみようとアイデアを出し、行動に移していった。まず、馬に馬車をつけて保育園や福祉施設の訪問を行った。最初は馬の大きさに驚く子どもたちも、柔和な馬の顔をなで、大きな背中のあたたかさに喜ぶ。今では、施設の方からぜひ来てほしいと言

われるようになり、「あの馬に会いに来た」と足を運ぶ親子連れも徐々に増えてきた。開催地のお祭りなどにも積極的に参加し、もちをついてふるまうこともあった。

「もちつきもばん馬も腰が大事。力強いレースをぜひ見に来て」と宣伝も忘れないう。 「地域に好かれる競馬になろう」というのが今の調騎会の合言葉だ。寒い季節には競馬場の中で豚汁や甘酒をふるまう。「そんな時にお客さんの生の声が聞けるんだわ。じゃあ今度はこうしようとかアイデアも出てくるしね」

1年間に、旭川・岩見沢・北見・帯広と4つの競馬場を移動し、開催するばんえい競馬。忙しい本業の合間をぬっても競馬場を飛び出していくのは、ばんえい競馬に関わる人々がみな危機感をもっているからだ。不況やレジャーの多様化から、売上、観客数ともに厳しい状況が続いている。現に北海道に暮らしている人でもばんえい競馬の生の迫力にふれたことがない人はかなりいるだろう。「今日やって、明日売り上げが伸びるなんて大それたことは考えちゃいない。でもここは人間が踏ん張って走らないと」

騎手から調教師へ 苦難の道を救ったもの

弟子屈町で牧場を営む家に生まれた服部氏は、生まれたときからばん馬に囲まれて暮らしていた。学校を出たあとは、2時、会社勤めも経験したが、「やはり馬に関わる仕事がしたい」とばんえい競馬の騎手を志す。9年間の騎手生活は小柄な体格がハンデとなり決して平坦ではなかった。40歳で調教師として独立するが、最初は管理馬も少なく、思うように成績も上がらなかった。「なんか何もかもうまくいかない時に、親父を知っているって人が馬をまかせてくれてね。その時、人と人のつながりの有難さを感じたんだ」

それから、道内各地の生産牧場に通い、いい若駒を見つけては馬主に紹介するようになった。「自分で見つけた馬が順調に育って、重賞レースに勝った時は自分もうれいし、馬主さんも生産牧場も喜んでくれる。それが、この仕事の醍醐味だね」。05年には、調教師として史上6人目の通算1000勝を達成した。現在は、馬房の上限である25頭の馬とデビュー前の若駒をかかえる大所